

## 活動報告書

2008年7月4—5日にて、京都大学東南アジア研究所、オランダ戦時資料研究所共催の国際ワークショップ、“**Chinese Identities and Inter-Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia**”が、京都大学東南アジア研究所において、成功裏に開催されましたこと、ここにご報告申し上げます。

本ワークショップは、東南アジアにおいて記録されてきた「華人であること」の個々の経験を、より大きな歴史的文脈の中に位置づけ、とりわけ、経済、政治、文化、そして思想の変遷が、植民地時代、国民国家の時代それぞれの時代を通じて、どのようにして「華人であること」の意味やイメージを定義し、構築し、そしてときには再加工してきたのかを検証する。

東南アジアにおける「華人」の日常的経験、帰属性、自画像は、国境を越えた移民の経験、植民地国家、及び国民国家による近代化プロジェクト、グローバル資本主義、そして各時代の言説によって、様々な姿に形作られ、変容してきた。

経済を牛耳る、反体制的である、文化的に異質、といったように東南アジアにおいて、華人はしばしば問題視されてきた。この歴史的な位置づけが、民族間の緊張の源となり、経済ナショナリズムや権力剥奪、同化—統合論争・政策、そして、(とりわけインドネシアにおいては)暴動や暴力として現れるようになった。もっとも、「華人であること」とはそのような問題含みの歴史的事象や、ひとつの言説によって捉えきれるようなものではない。

「華人であること」のアイデンティティは、これまで研究者や国家、そして一般のイメージが規定してきたものより、はるかにより複雑かつ重層的、そして変幻自在である。中国の台頭と、東アジア（北東アジア、東南アジア双方含む）の地域的成長と地域統合の進展により、「華人であること」の意味は、各国の政策の変化、華人研究の成果、グローバル化と市場の変転に影響され、書き換えられてきた。我々の目的は、こうしていま進みつつある「華人であること」をめぐる、政治、経済、学会、文化、様々な力学のなかで、どのような再加工、そして駆け引きが行われているのかを紐解く。その上で、インドネシアを中心とした地域間比較の視点で、東南アジアにおける民族間の共存共栄を考える上で突きつけられているこの「華人であること」をめぐる問題を、明らかにすることにある。

本ワークショップの開会の挨拶は、水野広祐教授が行った。参加者10人全員が報告論文を発表し（プログラム参照）、内容の濃い、集中した討論が二日間を通じて行われた。ワークショップ後は、各発表論文を討論の結果をふまえ修正し、プロシーディングとして出版（その経費についてはCSEASに助成申請予定）、その後編著本として刊行することを一年後に準備することで合意した。

## ワークショップ詳細

1. タイトル：Chinese Identities and Inter Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia
2. 開催場所：東南アジア研究所 東棟 207
3. 開催日：2008年7月4-5日
4. 共催者：オランダ戦時資料研究所、アジア経済研究所 相沢伸広（連携代表）
5. 参加者：11名（発表者10名及び、水野教授（開会挨拶、パネル1司会者、および全体討論者として参加））

## プログラム

### 第一日 7月4日 金曜日

#### **13:00-13:15: 開会挨拶**

Professor Kosuke Mizuno, Director, CSEAS

#### **13:30-15:30**

#### **第1セッション：Networks and Localities**

司会: **Prof. Kosuke Mizuno**

Peter Post, (Netherlands Institute for War Documentation) Peranakan Elite Family  
Networks and Southeast Asia's Indigenous Royalty: Status, Modernity, and Identity  
Tatsuki Kataoka (ASAFAS), The Baba Culture in Thailand

#### **15:45-17:45**

#### **第二セッション: Claiming Citizenship**

司会: **Dr. Nobuhiro Aizawa**

Elizabeth Chandra (Keio), The New Indonesians: Chinese-Indonesians and the 2006  
Citizenship Law  
Caroline Hau (CSEAS), Blood, Land, and Conversion: The Politics of Belonging in  
Jose Angliongto's *The Sultanate*

## 第二日 7月5日 土曜日

**10:00-12:00**

### **第三セッション: State and Chinese**

司会: **Dr. Peter Post**

Ay Mey Lie (NIOD), Ethnic Chinese in the Indonesian Armed Forces: Identification and Participation in Historical Perspective

Nobuhiro Aizawa (IDE-JETRO), Delivering Citizenship: *DEPDAGRI* and the Chinese in the 1980s

**13:00-15:00**

### **第4セッション: Limits of Representation**

司会: **Assoc. Prof. Caroline S. Hau**

Nobuto Yamamoto (Keio), (In)Visible Chinese: State and Spectatorship in 1930s Indies

Junko Koizumi (CSEAS), Beyond the Assimilation-Sinicization Framework: Studies of the Chinese Society in Thailand Reconsidered from Historical and Local Perspectives

**15:15- 17:15**

### **第5セッション: Interrogating Identities**

司会: **Prof. Nobuto Yamamoto**

Yumi Kitamura (CSEAS), The Question of Identity and Religion in the Post-Suharto Era

Thung Ju Lan (Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia, CSEAS Visiting Research Fellow), The Search for Chinese Identity and Culture among Chinese Indonesians during the Post –Suharto Era

## 報告者紹介

相沢伸広：日本貿易振興会アジア経済研究所地域研究センター 研究員。専門は東南アジア地域研究。現在、インドネシアにおける“華僑・華人問題”および、インドネシア、タイにおける国籍、市民権、人の移動を中心に研究を進めている。最近の発表論文としては、「乗っ取られた同化政策ーインドネシアスハルト体制の同化政策」(2007)、「第五列から資本家へー華人・華僑問題とインドネシア -- 中国関係一九六六-一九九〇」(2006)が挙げられる。

Elizabeth CHANDRA : 慶応大学国際センター講師。2006年カリフォルニア大学バークレー校より東南アジア研究において Ph.D 取得。主にマレー華人文学、比較植民地研究、記憶の政治、アジアの人身売買について研究。

Caroline S. HAU : 京都大学東南アジア研究所 准教授。代表的著作として、*Necessary Fictions: Philippine Literature and the Nation 1946-1980*, *On the Subject of the Nation: Filipino Writings from the Margins*, *Intsik: An Anthology of Chinese Filipino Writing (editor)*, and *Voices/Mga Tinig: The Best of Tulay (co-editor)*が挙げられる。現在二つの編著本を準備している。一冊は東南アジア政治のバイオグラフィー(Kasian Tejapira 氏と共編) もう一冊は、*cultural politics of “Chineseness” in post-independence Philippines* をテーマとしている。

片岡樹 : 京都大学アジアアフリカ地域研究研究科 准教授。筑波大学卒業(社会学学士)後、筑波大学および九州大学において修士号取得。九州大学にて博士号取得。タイにおける山岳民族と華人移民に関する文化と宗教について研究を進めてきた。現在、周辺部からの東南アジア国民国家の再検討に関心をもち研究を進めている。

北村由美 : 京都大学東南アジア研究所助教授。一橋大学博士課程在籍。博士論文はインドネシアのポストスハルト期における文化と宗教に焦点をあてている。

小泉順子 : 京都大学東南アジア研究所 助教授。専門は歴史学。主にサイアム期バンコクの近代歴史学に関心を持ち研究を進めている。近年の代表的著作として英語で発表したものとしては、“From a Water Buffalo to a Human Being: Women and the Family in Siamese History,” in *Other Pasts: Women, Gender and History in Early Modern Southeast Asia* (2000), edited by Barbara Watson Andaya が挙げられる。とりわけここ数年は、サイアムと中国間の19世紀中頃から20世紀初頭にかけて、朝貢も、条約もなかった時代の「外交」に関する歴史調査を進めている。研究成果の一部は *Old Brother: China’s Place in Asia*, edited by Anthony Reid and Zheng Yangwen として刊行予定である。

Ay Mey LIE : オランダ戦時資料研究所 研究員。アムステルダム大学近代アジア史および現代史専攻学士取得後、オランダ外務省にて6年間勤務。最近では、在ジャカルタ大使館にて勤務。2007年からオランダ戦時資料研究所所属、インドネシアの独立過程と国家形成過程について研究を進めている。2008年9月からはアムステルダム大学/アムステルダム社会科学研究所にて、博士課程に在籍し、“Ethnic Chinese in the Indonesian Armed Forces: Identification and Participation in Historical Perspective” をテーマとして研究

を進める。

水野広祐：京都大学東南アジア研究所教授（2003—）。1953年生まれ。専門は開発経済学。Center for Development Studies (PSP), Bogor Agricultural University (1984-1986), Graduate Program in Development Studies, Bandung Institute of Technology, Indonesia, (1994; 1999-2001)等において、客員研究員を歴任。代表的な業績として、*Rural Industrialization in Indonesia, A Case Study on the Community Based Weaving Industry in West Java* (Institute of Developing Economies, 1996)が挙げられる。『インドネシアの地場産業—アジア経済再生の道とは何か?』（京都大学学術出版会）において、2000年発展途上国研究奨励賞、(アジア経済研究所)。これまで綿密な現地調査に基づき、インドネシアの組織及び経済の発展について研究をすすめてきた。2005年以来、タマサート大学—京都大学拠点大学交流プログラムの“Making Region in East Asia”プログラム長をつとめ、現在、東南アジア研究所の所長である。

Peter POST：オランダ戦時資料研究所主任研究員。オランダ—日本歴史研究プログラムディレクター。Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences リサーチフェロー(1992-1997)、第6回大平正芳記念財団助成対象者、そして現在、早稲田大学客員研究員、日本学術振興会外国人研究員。現在は、1870s-1960sにおける日本—中国間のビジネスネットワークの近代史の研究を進めており、数多くの業績を発表している。また、現在 *The Encyclopedia of Indonesia in the Pacific War* (Leiden/Amsterdam: Brill Publishers and NIOD, forthcoming) の総編集責任者であり、国際研究プロジェクト “Regime Change and the Dynamics of Culture: Family, networks and representation New perspectives on Indonesian Chinese life in Southeast Asia and beyond, 1920s-1970s.”の代表者をつとめている。

THUNG Ju Lan：インドネシア科学院社会文化研究センター主任研究員。La Trobe 大学において、博士論文“Identities in Flux: Young Chinese in Jakarta”により、1998年 Ph.D 取得。代表的な論文として、“Chinese in Jakarta After 1965” in Christopher Houston, Fuyuki Kurasawa and Amanda Watson (eds) *Imagined Places: The Politics of Making Space*, La Trobe University, 1998; “Rethinking the ‘Chinese’ Problem” in Michael Godley & Grayson J. Llyod (eds.) *Perspectives on the Chinese Indonesians*, Adelaide: Crawford House Publishing, 2001; “Ethnicity and Civil Rights Movement in Indonesia” in Lee Hock Guan (ed.) *Civil Society in Southeast Asia*, Singapore: ISEAS, 2004 を発表している。2007年1月、シンガポール大学アジア研究所、客員研究員として、新研究プロジェクト“POLITICAL” CHINESE & “CULTURAL” CHINESE: A Conceptual Debate on the Issue of Chinese Identity and Chinese Indonesians’ Political Representative-ness を開始し、また 2008年7月から 2008年12月まで京都大学東南アジア研究所にて6ヶ月間の

客員研究員として、“The Search for Chinese Identity and Culture among Chinese Indonesians during the Post –Suharto Era”のテーマで研究を進めている。

山本信人：慶応大学法学部東南アジア研究教授。慶応大学グローバルセキュリティ研究所、研究ディレクター兼務。現在の主な研究関心は、植民地期インドネシアにおけるサーヴェイランスの政治、インドネシアにおける暴力の変容、東アジアにおける国際規範と各国政治の関係。

#### 今後の成果発表予定

1. シンポジウムのプロシーディング発表のため、発表論文をとりまとめ、東南アジア研究所の研究発表助成に応募予定である。12月末の刊行を予定。
2. 各論文は編著本の為に準備改訂中である。2009年6月までに京都大学出版会および Singapore University Press に提出予定である。